

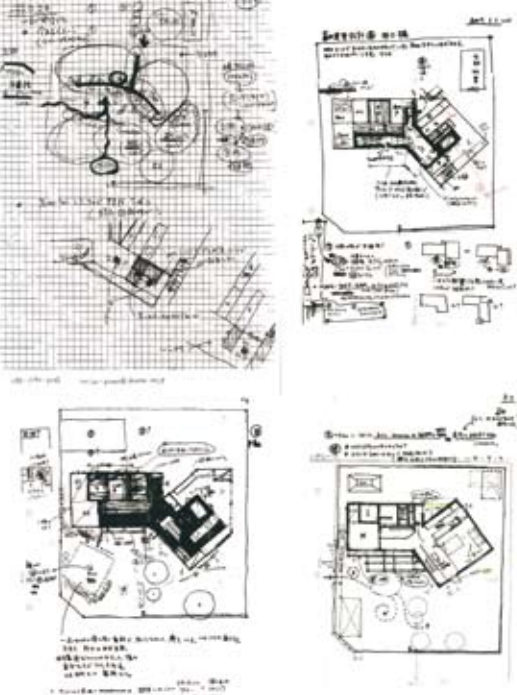
平成22年度 第19回建築作品 最優秀賞 高田建築設計事務所(長岡市)

バナキュラーな家

Space is Flowing:土間は島々を結ぶ川の流れるように

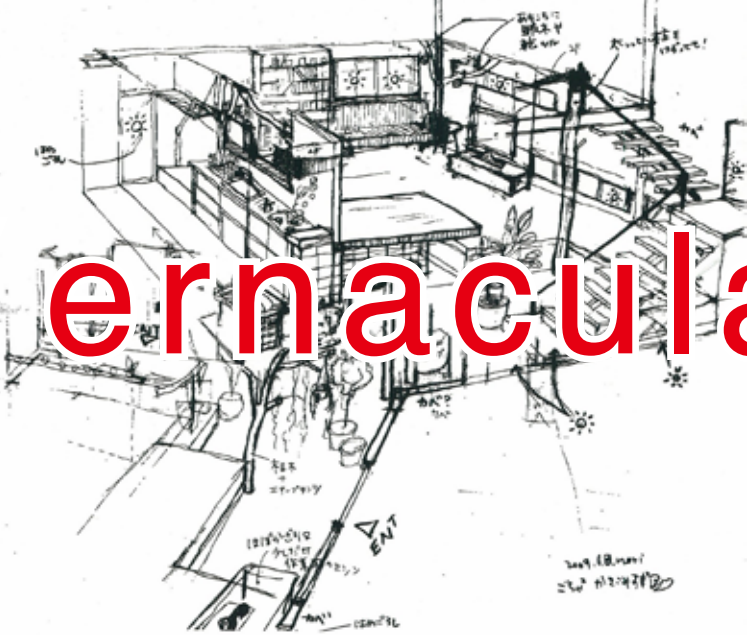


Sketch book

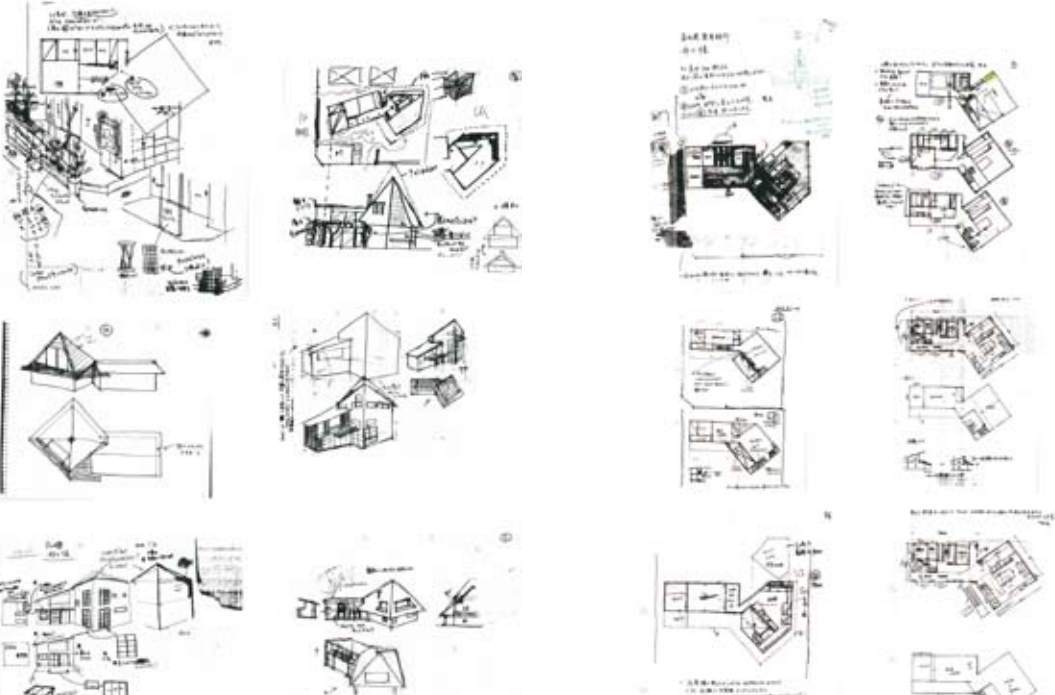


住まい方が急速に進化している。反面、様々な要素に縛られて、何か窮屈さを感じる。この現状を、本当に進化と呼んでよいのだろうか。もしかしたら、退化しているのかもしれない。人間らしさも同じように……。

Vernacular



Sketch book



大きな土間を造り、暖は昔ながらの薪でとる。土間と居間との境界は、当然、昔のような段差ができる。この段差に座り、人と人の会話が生まれる。家の中に植物を置くのではなく、植物を植える。

少しだけ私達の想いは解決できないことがあった。何でも数式で解くことができると言ったピタゴラスの定理、 $a^2+b^2=c^2$ 3:4:5の軸線を採用する事にした。私達は人間である。



外観は、塔(山)と箱(平地)の組み合わせ。外壁は、無機質(ガルバリウム鋼板)と有機質(ラージ合板)の融合
土間は、結界の役目:自然と人工が交差するところ。すま居方も家族が出会う交差点。“外”と“内”をつなぎ、“昔”と“これから”を結ぶ“今”(居間)。
太陽光による自然採暖と薪ストーブによる人工採暖のコラボレーション

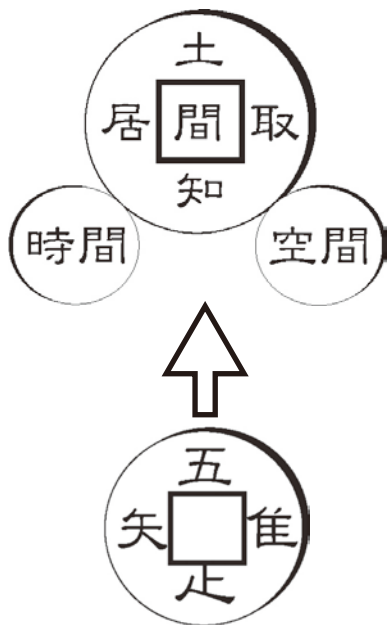


「分け」と「合わせ」

バナキュラーな家コンセプト

「分け」と「合わせ」の「間」のすまい建築は様々なエLEMENTの積み重ねから成り立っている。住宅という最小限の建築空間にバナキュラーな「外と内の相互貫入」「分けと合わせ」の手法を試みた。「土間」:外と内を分ける結界の役目をしてくれる。かつてサーバントスペースであった土間がマスタースペースとして機能するのである。「間取」:アミーバー状に触手を伸ばし外空間と内空間の融合を図る。「間知」:鈍角に振られた配置は心地よい「居方」と距離感「間を知る」ペクトルを作り出している。「居間」:自然と人工が交差するところ。すま居方も家族が出会う交差点。外と内をつなぎ“昔”と“これから”を結ぶ中間帯である“今”=居間。「時間」:土間に設けられた植栽は太陽光と土がもつエネルギーを時の営みの中に成長をする。

「空間」:デザインはシンプルに!
空間は流れるように!

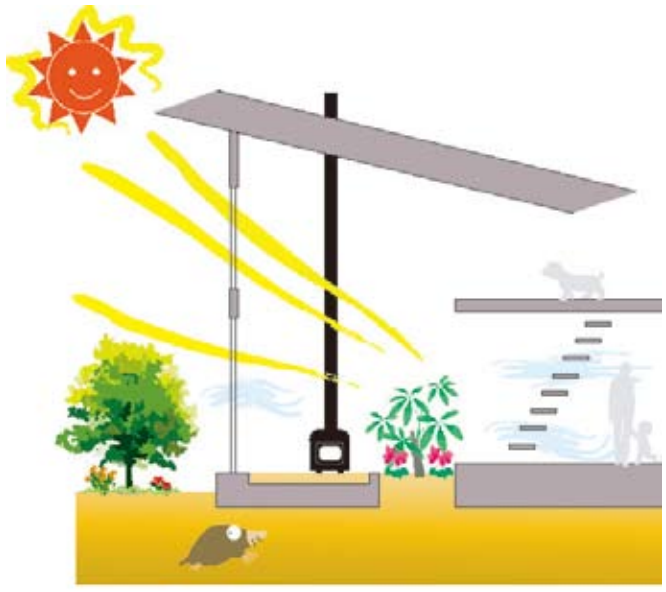


竜安寺の知足の蹲

「分け」と「合わせ」の「間」のすまい

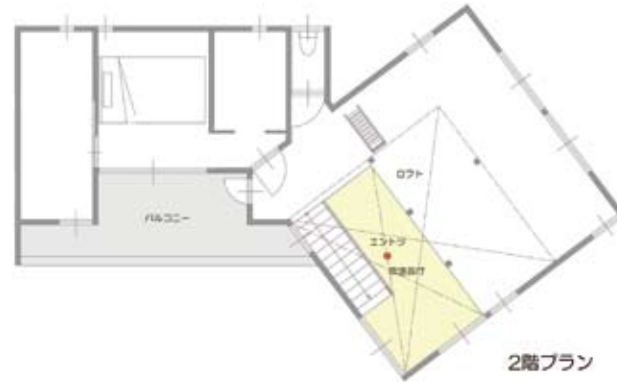
建築思考に「分け」と「合わせ」の思考を持ち込む事は尤も初原的なことでもある。
中心に「間」を置き四周に分けられた「土」「居」「取」「知」を合わせる事で、新しい「空間」創造を「時間」の成長と共に目指すものである。
“自然と人工”・“デザインとテクノロジー”等々と「仕分け」る思考形態で近代建築はかなりの成果を上げてきた。時代の方は分けてきたものを統合・「合わせ」る事でそれらが同化し始めてきた。

外と内の相互貫入



Section

*室内植栽は、大地のエネルギー(栄養分)を直に吸収する
*室内植栽は、太陽光をたっぷり受ける
*室内植栽は、温湿度調整の役割も担う



敷地面積 292.15㎡
1階床面積 68.88㎡
2階床面積 56.35㎡
延床面積 125.23㎡